

絵画教室ネットワーク Ga-net 通信 vol.9

Ga-netの2011年度研修会では季節の教材研究と平行して、「絵本の導入からの絵画研究」のメニューを毎回盛り込みました。そこでは絵本は子どもの想像をかき立て、絵画の造形性を読み取るのに有効であることなどが話し合われました。学校教育現場では現在「鑑賞教育」が盛んになってきています。絵を描いたり作ったりすることは、同時に美的情報や視覚的な造形性を読み取る力の育ちが必要ということが分ってきたのです。現代では特に子どもの周りには映像、画像情報が氾濫しているのです。上記の力は必須といえるでしょう。絵本はそういう意味で鑑賞教材になっています。

さて、今年度Ga-netでは、さらに深め、「子どもの発想を大切に導入、援助の工夫」を研究していきたいと思えます。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

Ga-net代表 栗山誠

『朝日こどもの日新聞』



2012年5月5日(土)朝日新聞全国版に『朝日こどもの日新聞』と銘打ち、絵画教室に通う子どもたちの絵が、企業広告として掲載されました。

子どもたちの元気な絵で、明るい希望や未来をメッセージしたい、という朝日新聞社の企画にGa-net事務局と有志会員が制作協力したものです。



「創造的な場を、それぞれの地域に広げていきたい」このGa-netの理念に共感している正規会員に、朝日新聞大阪本社の広告局が直接の協力依頼を呼びかけ作品を募集しました。また、4月7日8日の2日間に大阪中之島にある朝日新聞本社内に有志会員の教室生徒150名に集まってもらい、絵画制作～お絵描き大会を実施しました。

新聞社内に子どもと保護者を招き、制作活動をするには「創立以来なかった」ことだそうです。



「みんなの描く絵で、震災で辛く悲しい想いをしている人たちを元気にしてあげられるかもしれない。子どもにだって出来る支援があるんだよ。みんなの力をかしてね。」と活動前にメッセージし、社会貢献であることも伝えました。



新聞の企業広告に、子どもが絵を描く、企業側が望むテーマに基づいて絵を描く、というのは、子どもらしい自由さが無いように思えるかもしれません。

白い画用紙に何でも自由に描いてね、というのと異なります。制約の何もない自由と、条件付きの活動では、どちらが子どもにとっていいものなのでしょう？



各企業が提示する、条件付きのテーマで絵を描く事は「子どもにとって教育的な活動だといえるのだろうか。」という外部からの意見がありました。お絵描き大会を終了し、会場を退出する多くの子ども達と保護者が「ありがとうございました。いい経験をさせてもらい、親としても楽しめました。」と挨拶されるのを見送りました。

また、その後に集まったGa-net研究会で参加した教室の先生に子ども達の意見や感想、様子をたずねたところ、楽しかった、ということに加えて子どもに集中力がついたと感じる、という報告を興味深く感じました。

今回は条件や規制を「不自由なモノ」とイコールにせず、ゲーム感覚で楽しむ方向に持っていこうと試みました。



新聞というメディアを通じての発表と社会参加。いろいろな角度からアプローチして、子どもと、そして保護者と共に育つこと。それは社会教育である絵画教室だからこそ、可能性があることかもしれないと、子どもの日新聞の企画に関わったことから感じました。

<報告> Ga-net事務局 赤座雅子

★教室紹介★

「あすなる絵画研究所」

『ケアハウス(老人介護福祉施設)で教室を開講～あすなる絵画研究所 元代表:大貫みち子先生を訪ねて』



Ga-net新聞では、毎回会員の教室を取り上げ、紹介しています。今回は40年以上、二代に渡り教室を運営されているあすなる絵画研究所を取材させていただきました。

大貫みち子先生(80歳)は30代後半奈良YMCA(Young Men's Christian Association)の絵画教室講師としてスタート。同校で発達障害～ハンディキャップのクラスもつくられました。同時に、あすなる絵画研究所を創設、生徒数300名余の時期もあったそうです。5年前に代表を島田時子先生に譲られ健康が良好な状態で、関西国際空港～りんくうタウンに隣接したケアハウスに住居を移されました。ハウス内外で教室をされている!と島田先生からお聴きし、Ga-net事務局はかねてよりインタビューしたいと目論んでおりました。

島田先生と同教室講師の宇野かおり先生(介護ヘルパーの資格所持)に同行いただき、5月22日(火)海の見えるお住まいにお邪魔しました。昨年、アメリカ在住の実姉様を訪ねられた、とお聴きして、かなりお元気なのだとは予測していました。車椅子ではありませんが、十分お元気そうで、満面の笑みで迎えていただきました。

現在、子どもと大人の「英語」の教室をケアハウス内外で行なっています。もともと神戸女学院・英文科のご出身で絵画教室を運営しながらも、好きな英語とは離れず、勉強を続けてこられました。70歳で改めて英語の必要性を感じ、学

び、教えていこうと決意。絵画も英語も先生にとっての境界線はなく、どちらも子どもの教育であることに



変わりはないということです。窓から海が見えるホテルのような佇まい。先生のお部屋は書斎の雰囲気、本棚にはたくさんの英語のテキスト。壁には実姉様(アメリカで画家として活躍中)の絵が飾られていました。グレイッシュな瞳が輝き、「今年こそ、英検1級を取るわ!」と、まだまだ将来の夢や希望を熱心に語られる様子には勇気づけられる想いでした。

『21世紀は創造の時代・自分の思いを表現できる子に!!』

子どもは紙がなくても土の上でも絵を描きます。彼らの成長に必要なことから描くのです。感性を耕すことで知性は確かなものになる。知性は感性の力を借りてはじめて本物の知識となる。芸術は表面上のかしこさより、確かに豊かな人生を約束するでしょう。この大貫先生のメッセージに「惚れてしまった。」と島田先生。「私は瞬発力、島田さんは持久力」と語られた大貫先生。直感で次々と教室を開拓されてきました。島田先生はその理念を受け継ぎながら現在、10教室8人の講師で運営されています。理念を受け継ぎつつ、時代に合った試みが続けていく。それは、たやすい事ではないでしょう。

具体的なお話を伺ってみました。

あすなるさんの講師の採用基準は? 「いいスタッフに支えられている。」と、しばしばおっしゃいます。メンバーは島田先生をはじめとした美大出身者、元・幼稚園・小学校教諭、介護福祉士などで構成されているそうです。「美術系芸術系の大学出身に特にこだわりは持ちません。」 「子どもの気持ちを大切に、人間性があること。いい人であることが一番大事。」 「この講師はどうか?と少し思っても、3年は見守って育てます。」

経営についてお尋ねすると…… 「どの教室も順風満帆とはいきません。正直、苦しい所もあります。けれども生徒が嬉しそうに描いて、お母さんに褒めてもらっている様子を見ると、もうちょっと頑張ろう、とスタッフと励まし合っています。」この辺りが持久力と言われる由縁でしょうか。

少しハンディがある子の教室もある、とお聴きしています。島田先生は20年近く、障害者のアートに関わっていました。以前「どうしたら障害のある方の指導ができるのか。」と質問した所、「同じ人間なので、障害者という枠をつくって見ていない。」と、あっさりおっしゃっていたのを印象深く記憶しています。「世の中、天候も不安、政治も安定しない。事故も多い。けれども、どんな時でも子どもたちが絵を描く楽しみがあっていい。それは大人たちの喜びにもなるから。」と。



「大きな声でなくとも、メッセージし続ける」そんな持久力の強さが伝わってきました。

年齢を重ねる、年をとっていくことを恐れない人はいないでしょう。私自身、年とった病気の義母と生活を共にしているとどのように生きていくと、よりいいのだろうと感じ、考えてしまいます。いつまで教室ができるかな?体力が続かなくなったら病気したらどうしよう? 絵画教室は定年のない仕事ですが、多くの先生は自分で自分自信の管理や目標を立てていかねばなりません。

「子どもが好き、というより、子どものことが分かるのよ。愛おしくて傍にいたい。」このことが教育の原点かな、と思われる大貫先生の言葉です。

健康状態や環境が変わる事も受け入れて、尚かつ自分の進む方向がブレない。そんな大先輩にお会いできたと思っています。

(取材報告:赤座雅子)

★大貫先生のお話を伺いたいという方、通信までお便りください。先生にお伝えします。

2011年度 研究会報告

第1回 研究会 6月26日

第一部:
『絵本を通じた描画の導入』
～雨降り絵本から導入のきっかけをつくる～

講師:赤座雅子(キッズクラフト)

「三原色の雲」
「あおいくも」ブロンズ新社刊
トミーウンゲラー作・絵 / 今江祥智 訳

あおいくも



気楽に空をただよう青い雲。ふとした事から人間たち同士の争いを見つけます。「色」の異なる人種を、自分の「青色」を出し切り、みんな青くして平和な世界をつくれます。教室で「あれっ?青い雲は何処に行っちゃったの?」と、子どもたちに聴くと「みんなの心の中。」とこたえた子(小学3年生)がいました。



第二部:『夏休みの工作～造形』

*好きな人へプレゼント
～父の日に向けて
講師:赤座雅子(キッズクラフト)

今年ではセロファン紙を使った用紙で似顔絵作品を贈りました。タオルやハンカチを入れる箱の上蓋です。光を当てると下絵と像が重なります。



*「マジカルミラー貯金箱」
講師:栗山誠(帝塚山キッズアート)

さいころ状の箱にミラーシートを挟みます。シンメトリーなオブジェを作って貼ります。なんで浮いているのかなあ?と言ってもらえたら大成功!



*「透明サマーバッグ」
講師:栗山誠(帝塚山キッズアート)



テーブルクロスのビニールをカットしてひもで編んで袋状にします。後は好きなように油性ペンで描いたりシートを貼ったり、アレンジします。夏休みのワークショップでも人気だったそうです。

前半講師交代の前に 6月20日に滋賀県の成安造形芸術大学で開催された 滋賀芸術学舎 <http://www.shigagei.com/> の作品展「Rolling Egg」の報告 質の高い、丁寧な運営と制作を紹介しました。



アトリエHandHandの岩男さんが素敵な作品を持って来てくれました。今春、京都でKlee展がありそれをヒントに制作したとの事です。

皆が持ち寄ってくれる事でGa-netの研究会は、表情豊かに膨らみます。興味関心のある方の参加を御待ちしています。



第2回 研究会 9月18日

第一部:
『絵本の導入からの描画研究』
講師:赤座雅子(キッズクラフト)

色画用紙を使った絵画制作をしました。



第二部:『クリスマス工作』
講師:河瀬かずこ氏(ヨークカルチャーセンター奈良こどものアトリエ)

今回の研究会が12月4日～既にクリスマス制作シーズンになるので、今年は前倒しで行いました。



クリスマス工作実技の前に、最近展示された作品展の絵画作品を紹介していただいた。予告にも出したワイヤーとペーパーの2種類のクリスマスツリー工作を行った。エアパッキンで作ったスタンプに金粉を塗りツリーを飾るなど、取り立

てて特別なものではないのにセンスの良さでこれだけのものがつくれるのだ、と参加者を感じさせた。デザイナー出身ということもあるのですが、ひとつひとつ細かく丁寧に仕事をされている。10名前後の生徒を対象に、きめ細かな指導と準備、カリキュラムを組んでいる様子が参加者に伝わった。生徒一人ずつ、制作についての成長記録もとるなど作業の合間の話にも傾聴させられる内容が多く、会終了後も質問が途切れなかった。

第3回 研究会 12月4日

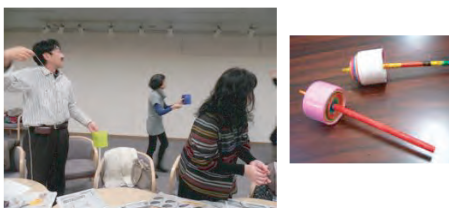
第一部
『絵本から描画の取り組み』
『年賀状～龍を描く』
講師:赤座雅子(キッズクラフト)



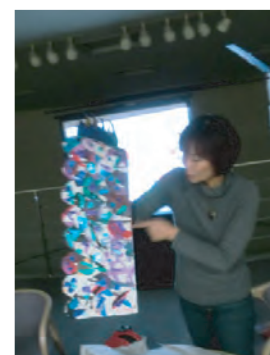
絵画造形教室らびすさんの龍にヒントをいただき黒い紙にボンドで龍を描き、その上にコンテの粉をふりかけました。意外な事に中学生がのめり込んで「はまった!めっちゃオモロイ!」と4時間から6時間制作していました。

制作終了後、撮影してトリミング～黒がベースなのでカラー調整が必要ですが文字を入れてレイアウト。毎年教室の最終日に生徒に渡しています。保護者にも喜んでもらっています。

第二部
実技:『お正月工作～15分でできる凧と駒』
発表者:栗山誠(帝塚山キッズアート)
北田絵里子(絵画造形教室らびす)



第三部
『作品展ができるまで～11mの龍(協同制作過程)』
講師:宮本みのり氏(プチクレヨン)



ご自身のプロフィールから精華大卒業後に和歌山県で小学校教師となり、その後結婚し絵画教室をはじめた経緯から話された。実母様が絵画教室を運営され

2代目になる。母親といえども「厳しい師匠」で、作品展のディスプレイについてもかなり批判もされるとか。体調を崩され、リハビリしながらの活動。来年は辰年なので、「11月の作品展は龍にしよう。」と、計画構成してすすめられた。毎年、プチクレヨンさんは作品展を目標に制作されているそうで、絵画制作も4つ切りの龍の作品を見せていただいたが、児童画展/コンクールには出さない、ということである。作品展のメイン、11メートルの龍は、素材から作り、コラージュしたものを集合させ一体につなげている。作品展終了後は解体して、一人ひとりに返却し、各家庭でタペストリーとして飾られているとか。手作りにこだわり、子どもたちと奮闘している様子が伝わり、元気をもらった90分の講演であった。

第4回 研究会 4月22日

第一部
『動く絵』
講師:赤座雅子(キッズクラフト)

絵本の導入はハッチンスの「風がふいたら」黒い紙に合わせた細長い画用紙を差し込みます。ゲーム感覚です。ルールをいくつか設定して、子どもの発想の聞き手になって、指導者の意見を押し付けられないようにしました。

もう一つは「影」の絵。Ga-net会員の作品展で見たものを自分の教室なりにしてみました。平筆で画面をつくり、黒いマジックでシルエットを描きました。

「飛ぶ工作」
講師:北田絵里子(絵画造形教室らびす)

教室の活動時間が少し余った時に5分間工作を紹介



討論会～フリートーク
テーマ「みんなに迷惑をかける子を怒りますか?」

絵画教室に集まる子は、絵が好きで、それを伸ばしてあげたい保護者で構成されるのがほとんどであろう。

学校や地域、年齢や発達が異なるさまざまな個性の子どもたちが一定の場所と時間に活動する。共通しているのは、その教室で何か描きたい、つくりたい、という想いである。

大切にしたい時間である。けれども、他の子どもたちと協調することが困難な子どもがある。

参加者には軽度発達障害の生徒が多い教室の対応、保護者との連携の方法、臨床心理士の友人のアドバイスなど、それぞれの取り組みを、具体的に話してもらった。

保護者の目の前で迷惑をかけている子どもを怒りにくい、怒っている、などの意見があった。「怒るべきだ」という意見はない。

初参加も何名かあったが、それにも関わらず、どんなことで悩んでいるのか、それぞれの発言があった。

それには各人が「なんとかしたい、してあげたい。」という共通した想いがあるからなのでないか。

これが正解である、という回答は出ないが、子どもたち、親たちを違う角度から見直すきっかけになれば願う。

*フリートークは今後継続して時間を設ける予定です。テーマをお寄せください。

興味関心のある方は、どなたでも参加できます。